

## 開明的知識人層の形成

—— 20世紀初頭のベトナム ——

白石昌也\*

### **The Emergence of New Vietnamese Intellectuals at the Beginning of the 20th Century**

by

Masaya SHIRAISHI

(1) Phan Chu Trinh was born into a traditional village family of rural intellectuals in 1872. And Phan Boi Chau was born in 1867. Trinh, Chau and others with similar backgrounds became leaders of new movements around 1905. They condemned the existing educational and mandarin examination system as well as corrupt officialdom, to which they attributed their nation's decline. They stressed the importance of introducing new thoughts, new knowledge and new education into the country, and advocated movements called Duy Tan (Innovation) and Dong Du (Visit-to-the-East).

(2) The following factors which led younger Vietnamese intellectuals from traditionalism to modernism are noted. (a) The first and most basic factor was sensitivity to the humiliating loss of the country's sovereignty and the possibility that the nation would be destroyed. (b) Simultaneously they were disillusioned with the Vietnamese court and its mandarins, and because of this most of them were very hesitant about entering the service of the Emperor. (c) Consequently they no longer regarded the mandarin examination as one of the primary goals of their lives. Once they began to feel this way, they hated this old-fashioned system all the more, because their youth was wasted studying for these examinations. (d) Around 1900, they became interested in Chinese ideas concerning modernization through which they learned of Japanese attempts to modernize together with those of Chinese. Inspired by these thoughts, the Vietnamese intellectuals became better able to articulate their feelings about Vietnam's fate and their doubts about the mandarin and the examination systems.

Thus the new Vietnamese intellectuals emerged as advocates of new movements in the first decade of the 20th century. These movements away from traditionalism were probably strengthened by the development of commerce in the country side.

(3) Phan Chu Trinh, in his "Letter to the Governor-General," reportedly written in 1906, appealed to the French to adopt a new policy to modernize Vietnam. In one sense, this was a challenge to the traditional Vietnamese elite. Trinh identified himself as a member of the new intellectuals and he claimed that they had the right to replace the mandarins who, he felt, had been obstructing the progress of the nation. The mandarins, of course, responded quickly. They were eventually successful in completely wiping out the new movements in 1908, when peasant demonstrations against taxation and corvée system were crushed.

\* 東京大学社会学系大学院 (国際関係論コース)

## 序

20世紀初頭のベトナム民族運動を指導したのは、開明的知識人<sup>1)</sup>である。彼らはおしなべて1860～70年代に在村の伝統的知識人<sup>2)</sup>の家系に生まれている。そしてその青少年時代を、伝統的な学問（旧学）の習得のために費やした経験を持っている。1900年前後に至って彼らは科挙に合格し、それまでの勉学への没頭の見返りとして、知識人社会における榮譽と名声を掌中にし、かつは官吏として出世するための必要条件を満たすこととなった。

しかるに彼らの成長した時代はまた、フランスによる植民地化が進行し、それに対するベトナム人の抵抗闘争が燃え広がり、やがて挫折してゆく過程と軌跡を同じくしていた。こういった時代情況のゆえに、彼らは伝統的知識人としての道を大過なく進むことを、みずから拒否する宿命を背負っていた。

このような時代情況は、世界史の流れの中で見れば、西欧の侵略（あるいはその脅威）に直面していたアジア諸国が、一様に共有していたものであった。中国はアヘン戦争以来日清戦争に至るまで幾多の試練を経験し、洋務運動や変法自強運動で西欧（文明）の挑戦に対抗しようとしていた。日本は黒船騒動以来の衝撃の中で、明治維新、富国強兵、立憲君主体制の確立という形での新たな道を模索していた。19世紀後半に生まれあわせたベトナムの知識人たちも、中国や日本が解決を迫られたのと同じ問題に直面した。

またベトナム史の流れの中で見れば、彼らの生まれ育った時代環境は、自分たちの祖国がフランスの支配体制に組み込まれてゆく過渡期にあたっていた。むろんフランスはその植民地化の過程において、ベトナムの伝統的な在村知識人層（すなわち開明的知識人の父の世代）の頑強な抵抗に直面した。後者は自己の生まれ故郷を基盤とし、また農民とのごく日常的な関係のゆえに農民を自己の同盟者とすることに成功していた。<sup>3)</sup>しかしその闘争形態は、過去1000年にわたって中国の侵入に対して取られてきたものと基本的には変わりがなかった。その闘争がフランス人の武力と政治的術策の下についえ去るありさまを、田園に囲まれたそれぞれの生まれ故郷で眺めていた少年たちは、やがて長ずるに及んで祖国の運命が自分たちの肩にかかっていると自覚した時、旧套を打破する以外に民族の危難を回避する道はないと明白に認識したのであった。このかつての少年たちが、20世紀初頭の開明的知識人たちであった。

1) 「開明的」と言う用語は、谷川栄彦『東南アジア民族解放運動史』（経草書房、1969）p.47 以下に従った。ちなみにこの用法は徳川時代末期の日本の知識人についても用いられている。例えば中沢護人・森数男『日本の開明思想』（紀伊国屋新書、1970）。

2) 伝統的知識人の定義については脚注(6)を参照されたい。

3) 19世紀抗仏蜂起における在村の知識人層と農民の関係について述べたものとしては、David Marr, *Vietnamese Anticolonialism, 1885-1925*. (Univ. of California, 1967); Truong Buu Lam, *Pattern of Vietnamese Response to the West*. (Yale Univ. 1967); Đặng Huy Vân の *Nghiên Cứu Lịch Sử*, 誌, 75, 94, 99, 112 各号所収の論文。

これ以後フランスの植民地支配体制が確立し、長期化してゆく段階で、やがていわゆる近代の知識人がベトナム史にも登場してくる。彼らは西欧式の教育を受け、また都市に集中していた。その意味で彼らは、農村に住み伝統的な学問に従って教養を積んできた従来の知識人とは大きく異なるものであった。こういった新たな知識人層は、ベトナム史においては1920年代以降に形成された。19世紀後半の抗仏の闘士を第一世代、20世紀初頭の開明的知識人を第二世代とすれば、彼らは第三世代の知識人と称しうるものであった。しかしこの第三世代の出現をまつまで、近代的な思想や知識がベトナム人に受け入れられなかったというわけではない。こういった近代性への着目は、伝統的な学問の中で育った開明的知識人、すなわち第二世代の知識人の中にすでに見出されるのである。

本稿の目的は、この第二世代にあたる開明的知識人が旧来の知識人のあり方に疑問を抱き、「近代」に目ざめていった軌跡をたどることにある。とりわけファン・チュ・チン (Phan Chu Trinh)、チャン・クイ・カップ (Trần Quý Cáp)、フィン・トック・カン (Huỳnh Thúc Kháng) (以上クアンナム省)、ファン・ボイ・チャウ (Phan Bội Châu) (ゲアン省) の4名の中圻 (アンナム)<sup>4)</sup> 出身者にその焦点をあてつつ、当時の開明的知識人層の全体的な概観を把握することに努めたいと思う (I—IV, VI節)。

しかる後にファン・チュ・チンに焦点を絞って、彼が実践した運動について、その幾つかの側面に触れてみることにしたい (V, VII節)。ここでファン・チュ・チンに限定したのは、彼についての資料が比較的入手し易いこと、開明的知識人の運動と一口に言ってもそこには非常に異なった傾向が存在しており、それらを同列に論じることはできないこと、などによるものである。

## I 生い立ち

ファン・ボイ・チャウは1867年、ゲアン省 (Nghệ An) の村塾教師の子として生まれた。クアンナム省 (Quảng Nam) 出身のファン・チュ・チンは1872年生まれ、父は科挙に失敗し、代わりに武官職を手に入れた村内の有力者である。フィン・トック・カンは1876年に同じくクアンナム省に生まれた。父は農耕しつつ村の少年達に手習いを教える村塾教師であった。<sup>5)</sup> 彼らの生年は1860—70年代、家系は在村の知識人階層<sup>6)</sup> である点で一致している。

- 4) 仏領時代のベトナムは、北よりトンキン (Tonkin)、アンナム (Annam)、コーチシナ (Cochinchine) と称されたが、現在のベトナム人は、これを用いない。本稿においては、原則として、北圻、中圻、南圻と呼ぶことにする。
- 5) 三人の伝記としては、Phan Bội Châu, *Ngục Trung Thu*. (Tân Việt, Saigon, 1950). (長岡・川本訳、ファン・ボイ・チャウ『ヴェトナム亡国史』平凡社、1966); Phan Bội Châu, *Tự Phán*. (Anh Minh, Huế, 1956). (仏訳、Boudarel tr. "Phan Bội Châu: Mémoires." in *France—Asie/Asia*. 22-3/4); Huỳnh Thúc Kháng, *Phan Tây Hồ Tiên Sinh Lịch Sử*. (Anh Minh, Huế, 1959); Huỳnh Thúc Kháng, *Tự Truyện*. (Anh Minh, Huế, 1963) がある。
- 6) 本稿においては、在村の伝統的知識人層とは、(1)休退職官吏、(2)科挙に合格したが仕官せぬ者、および科挙受験の経験者、(3)教養ある村内の有力者 (村役人、郷職を含む) のいずれかに該当するものとして定義しておきたい。ここでは漢学の素養と、経歴としての科挙が重要な指標となっている。なお、真保潤一郎「十九世紀後半のインドシナ」『岩波講座、世界歴史』21巻、p. 130 の伝統的知識人の定義を参照されたい。

村内の金持、有力者、知識人の家族にとって、その一門から科挙合格者を出すことは大きな夢であった。ファン・チュ・チンたちの家族の場合もこの例にもれなかったであろう。幼い頃より聡明であっただけに彼らは一家の期待を一身に負いつつ、まず家庭内で（母親などから基礎的な漢字を習う）、ついで6～10才頃から村塾に通い始めることによって、学問の初歩を修得し始めた。<sup>7)</sup> そして10才代の中半からは、いよいよ科挙のための勉学、すなわち詩・賦の作法が始まる。これ以降科挙に合格する日まで、途中勤王蜂起(1885—)の混乱期の中断を除いて、彼らは研鑽に研鑽を重ねたのであった。この間に当時の勉学に熱心な青少年たちがそうであったように、彼らも良師を求めつつ、村塾から村塾へと転々としている。<sup>8)</sup> かくして20才前後になると、郷試に應ずることとなる。ゲアン省の場合にはその省都ヴィン(Vinh)に試験場があったが、クアンナム省には試験場がなかったため、ファン・チュ・チンたちは海雲峠<sup>ハイヴァン</sup>を越えて試験場のあるフエにまで赴かねばならなかった。<sup>9)</sup> 郷試は科挙の三段階の試験の第一段階ではあるが、それへの受験資格を得ることは、既にそれだけでも知識人社会での十分な格づけとなりえたもののようである。各省学での予備試験に優秀な成績を取めた者にして初めて郷試に應ずる資格を与えられたからである。<sup>10)</sup> むろん郷試に一度で合格することは至難の業である。彼らも3年ごとの試験を何度か受け直している。そうこうするうちに彼らは省内でその学才を知られるようになる。そして省学の学生に推薦されたりするのである。<sup>11)</sup> 同時にこの頃から村塾の教師として後進の者たちに勉学を指導し始めるようにもなった。

かくしてファン・チュ・チンは、1900年(29才)に第三位の成績で郷試を合格し、翌年(30才)の会試・殿試に合格して副榜の肩書を得た。これは進士よりは劣るが、秀才や挙人よりも遙かに高い格づけである。フィン・トゥク・カンも1900年(25才)の郷試に合格し、1904年(29才)には殿試に合格して進士となった。同輩のチャン・クィ・カップも1904年に進士となっている。ゲアン省のファン・ボイ・チャウは1900年(34才)郷試を首席で合格し、解元の肩書を得た。

伝統的知識人にとって科挙に合格するまでが、その人の人生の一区切りであった。彼らの場

- 7) ファン・ボイ・チャウは6才、フィン・トゥク・カンは9才、ファン・チュ・チンは10才から村塾に通い始めた。
- 8) ちなみにフィン・トゥク・カンの場合、彼が村塾に通い始めてから省学(官立の学堂)の学生となるまで、9才から21才までの12年間に師事した省内各村の教師はのべ15名であった。その内訳は、休退職官吏4名、府学の現職教授1名、進士1名、秀才4名、蔭生2名、不明3名であった。進士は殿試合格者、秀才は郷試合格者、蔭生は父からの官位の世襲者である。Huyñh Thúc Kháng, *Tư Truyện*, pp. 9-26.
- 9) 郷試は3年に一度開催された。当時の試験会場は、ナムディン、タインホア、ヴィン、フエ、ビンディンの5カ所におかれた。“Phan Bội Châu: Mémoires,” *France-Asie/Asia*. XXII. 3-4. note 19. by G. Boudarel. 会試、殿試は郷試の翌年、王都フエで行なわれた。郷試合格者には秀才・挙人、会試・殿試の合格者には副榜・進士の称号が与えられた。
- 10) Huyñh Thúc Kháng, *op. cit.*, pp. 19-20.
- 11) ファン・チュ・チンは1899年(28才)、フィン・トゥク・カンは1896年(21才)に省学の学生となっている。

合それに至るまでに費やした年月は20年余に渡っている。すでに年齢は30，人生もその半ばである。従来ならば彼らにはこの後に栄達の道が開かれるはずであった。（実際ファン・チュ・チンはフェでいったんは仕官している）。しかし科挙合格のために遮二無二邁進してきた彼らは、ここまで来たところで皮肉にも立身出世の道を放棄することとなったのである。

科挙のための勉学に、このように人生の半ばを費やしたことは、後年の彼らにとっては虚しく、かつ腹立たしいことであったに相違ない。彼らにとって科挙のための勉学にその貴重な生涯を費やした期間が長ければ長いほど、またそれへの没頭が深ければ深いほど、いったん科挙やそのための学を有害無益と感じた時、それへの嫌悪や痛恨の思いは、それだけ厳しくかつ深いものとなったであろう。

6才で村塾に通い始めてから34才で郷試に合格するまで、実に28年間を費やしたファン・ボイ・チャウは、『獄中書』の中で次のように痛恨の言を吐いている。

私は幼少から壮年時代にわたって頭が良いといわれ、螢雪の勤学も怠りませんでした。しかし得た所はわずかに科挙の学問にすぎません。……私達の出世の途はどうしてもこれ〔科挙の学問〕によらねばならず、またこの時勢に従うまいとしてもほかに学問の途はなかったのです。ああ、このような時勢にとらわれた私が、ただ科挙の文詞に空しくほとんど半生涯の歳月をついやしたことは、実に私一生の損失であり、経歴中の最も大きな遺憾であります。<sup>12)</sup>

またハノイのドンキン義塾に参加した知識人たちは、中国の『新民報』<sup>13)</sup>に載った科挙の六種の愚を述べた記事を回し読みしている。

第一の種類は囚人。試験の時には、テント・ベッド・ヒョウタン・ハコを持ち込まねばならない。囚人とどこが違うか。第二は泥棒。試験場にいったん入るや、兵隊に見張られる。(……)第三はネズミ。一日中試験場の中に坐って、時々冒険を犯して首を出してみる。穴の中のネズミみたいだ。第四はネコ。隠れて中に坐りつつ呑み食いする。(……)第五はエビ。合格発表の日、誰もが自分の名前を見て大喜びし、エビのごとく跳びはねる。第六はミミズ。名前の見つからぬ者は、悲嘆に暮れてミミズのごとくのたうつ。<sup>14)</sup>

これはベトナムの知識人にとっても実感として良くわかる揶揄であったろう。このようにしてファン・チュ・チンたちは、伝統的な科挙の学に深くかつ長く関わってきたがゆえに、それへの最も徹底した批判者ともなりえたのであった。

だがこれにはもう一つの面がある。彼らが最も高名でかつ権威ある科挙批判者・旧学批判者

12) ファン・ボイ・チャウ（長岡・川本訳）『ヴェトナム亡国史』（前掲），p. 101.

13) 『新民叢報』のことであろう。

14) Nguyễn Hiền Lê, *Đông Kinh Nghĩa Thực*, (*Lá Bối, Saigon*. 1968) p. 88. 宮崎市定『科挙』（中公新書，昭和38年）によれば、蒲松齡（『聊齋志異』著者）が、科挙受験生は七回様子が変わると嘲笑した（乞食，囚人，蜂の子，鳥，猿，蠅，鳩）と言う。本稿本文に引用したものは、これと同工異曲である。（pp. 92-93）

となりえたのは、皮肉にもほかならぬ彼らが科挙に成功した知識人たちであったからである。すなわち第一に、知識人社会での最高の榮譽を手にした者にして初めて、その科挙・旧学批判は重みを持ち、他の知識人に耳傾けさせる力を持ちえたからである。<sup>15)</sup> 第二に、とりわけ彼らの活動の初期にあっては、科挙や旧学に対する批判は漢文や詩賦によって書かれたが、格調高くかつ優れた作品を物する能力のあったのは、この時代にあっては科挙に優秀な成績を取めた人々である可能性が高かったからである。さらに第三の理由として、彼らが科挙の応試や、国子監での勉強、仕官などのためにフエに赴く機会に恵まれていたがゆえにその知識人サークルに接し、新書や新たな知識を吸収することができたこと。科挙排斥を含む新たな考えを、他の人々に先がけて抱くことができたことも付け加えてよいであろう。

## II 亡 国

ファン・チュ・チンたちが科挙に合格した直後になって、今までの自分たちの努力をすべて水泡に帰すような選択を行なった直接の要因は、中国からの新たな思想と接触したことにあると思われる。しかし、もし彼らの心の中に、ベトナムの現状と将来に対する深刻な危惧の念が前もって存在していなかったならば、そのような中国からの影響はいかなる役割をも果たすことができなかつたであろう。彼らに危機感をあおりたて、使命感を植えつけるような事態がベトナムにはすでに生じていたのである。それはフランスによる占領と植民地化であった。とりわけ中圻の場合、1885年の勤王蜂起 (Phong Trào Cần Vương)<sup>16)</sup> の昂揚と挫折が、この地域の次の世代の知識人たちに与えた衝撃は大きかった。

ファン・チュ・チンの父はクアンナム省の蜂起軍に参加している。チン自身も当時14才の少年にすぎなかつたが、父に従い、家を捨てて学問を捨てて、山中にこもり武芸を習っている。しかしこの蜂起の過程でチンの父は、義軍同志の対立が原因で斬殺されてしまった。<sup>17)</sup> ファン・チュ・チンにとって、勤王蜂起は、父の惨死や一家の悲運の思い出と分かち難く結びついている。

当時10才であったフィン・トゥク・カンもまた、この蜂起とそれに対するフランス軍の弾圧

15) 科挙の最終試験たる殿試を例にとると、『大越歴朝登科録』(越訳, *Đại Việt Lịch Triều Đăng Khoa Lục*, Bộ Quốc Gia Giáo Dục x. b. Saigon. 2 vols. 1963)によれば、1822年から1862年の間に行なわれた16回の試験の進士合格者は、累計154名にしかすぎない。40年で150名余の進士しか誕生しなかつたわけである。まさにエリート中のエリートであった。チャン・クイ・カップ、フィン・トゥク・カンは共にこの進士の肩書を持っていたことを想起されたい。ファン・チュ・チンはこれに準ずる副榜、ファン・ボイ・チャウは郷試しか合格していないが、それでも首位合格という榮譽を手になっている。なお、ベトナムの科挙制度の概観については、竹田龍児「ヴェトナムにおける国家権力の構造」山本達郎編『アジアにおける権力構造の史的考察』pp. 135-136.

16) 文紳蜂起 (Phong Trào Văn Thân) とも称する。

17) Huyúh Thúc Kháng, *Phan Tây Hồ*. Nguyễn Văn Xuân, *Phong Trào Duy Tân*. (Lá Bối, Saigon, 1970). などを参照。

の混乱の中で、多くの肉親を失っている。<sup>18)</sup>

19才であったファン・ボイ・チャウは、仲間たちと「試生軍」なる組織を結成して蜂起に参加するつもりでいたが、実際にフランス鎮圧軍が接近すると組織は壊滅状態となった。<sup>19)</sup>

この共通の体験の中から彼らが等しくひきだしてきた認識が存在した。それは、ベトナムの国家主権が失われたこと（亡国）、そして民族の存在そのものさえもが危うくなっている、という切実な自覚である。

例えばファン・ボイ・チャウは1907年の『和涙眞言』<sup>ホアレコンゴン</sup>の中で、

国亡三十年矣、種滅十〔中〕六七矣。

あるいは

数十年後、子孫絶滅、墳墓為墟。

と述べている。<sup>20)</sup>

こういった危機感とは、彼らの知識人としての使命感と表裏一体の関係にある。民族が存亡の危機に瀕しているとの自覚があるからこそ、彼らの使命感はそれだけますます強烈となるのである。

チャン・クイ・カップは『士夫自治論』<sup>シーフートウチルンアン</sup>の中で、

国之淪亡久矣（……）

〔士夫が〕及今不奮、

種類其危。

とその危機感とともに「士夫」としての使命感を表明している。<sup>21)</sup>

かくして、ファン・チュ・チンの『インドシナ総督あての書簡』（1906）の次の引用文に示されるごとく、危機感を抱いた知識人たちは覚醒し、行動に立ち上がろうとしたのである。

400万平方メートル以上の国土、2,000万以上の人民は、かつて半開の地位にまで至らんとした時期もあったが、今やまた野蛮に戻らんとしている。知識を持つ人間はこのような惨状を見て、民族が全滅するのではないかと恐れ、警鐘を鳴らし合って教え合うことを望み、救済の方法を心配し合っている。<sup>22)</sup>

彼らの亡国の認識、民族滅亡の危機感が、ここに引用したような形で表明されたのはずっと後代になってからのことである。また彼らの多くは、勤王蜂起の挫折のあとも10年以上もの間自分たちの危機意識を明確な実践活動にまで具体化することはなかった。けれども以降の彼ら

18) Huỳnh Thúc Kháng, *Tự Truyện*, pp.11-17.

19) Phan Bội Châu, *Ngục Trung Thư*, pp.13-14. (邦訳, p.102)

20) 『雲南杂志选輯』（中国科学院歴史研究所編, 北京：科学出版社, 1958）, pp.719-720. 引用文は、当用漢字に改めた。

21) Lam Giang, *Trần Quý Cáp*, (Đông Á, Saigon, 1970), 漢文之部19ページ。彼らがこの段階で国家と民族（種, 種族）を区別して用いていることは注目に値する。

22) Thái Bạch, ed. *Thi Văn Quốc Cầm Thoi Pháp Thuộc*. (Khai Trí, Saigon, 1968) p.349. 原漢文。

の活動を支える原動力となったのは、このような危機感と知識人としての使命感<sup>23)</sup>にほかならなかった。そしてそういった危機感は、勤王蜂起の際の体験とわかち難く結びついており、後日彼らを新たな思想へと開明化せしめてゆく要因となったのである。

### III 官界への失望

1901年殿試に合格したファン・チュ・チンは、1902年長兄（父死後の家長）死亡のため喪に服し、故郷にもどった。1903年32才の時フェで仕官した。その官職は礼部承弁、八品ないし九品の端役であった。<sup>24)</sup>

1903年に彼がフェ官界の内部に身を置いたことは、当時の彼が未だ伝統的知識人や官吏のあり方に対して完全な拒否の態度を取るに至っていなかったことを示していると考えられる。しかしこの仕官の期間中に彼は新学に接して新たな思想を身につけてゆくこととなり、また同時に官界内部に身を置いたがゆえに、従来の官吏制度に対する最終的な絶望感を深めてゆくこととなったのである。その意味でこの仕官時代が、ファン・チュ・チンの以後の生涯にとって持っている意味は大きい。<sup>25)</sup>

彼らは万事につけて下手なのに  
 ≪土は四民の第一≫などとうそぶく  
 卿相、縉紳は  
 百芸の内 その身に何の芸を持つと言うのか  
 ただせいぜい二三字を知っているのみ  
 幸運にも 民を食い物にし  
 寛やかな上衣と長い裙子も誇らしげに  
 キンマの箱と履き物をうやうやしく持たせ  
 馬車はギンギン  
 彼の下には 動き回る連中が数知れない  
 お世辞を覚え おこぼれを求める  
 秀才先生や 耆豪の旦那は

引用に使ったものを含めて3種の越語訳が筆者の手元にあるが、原文はまだ入手していない。

23) 知識人の使命感は例えば、ファン・ボイ・チャウの『和涙貢言』においても示されている。

24) Huỳnh Thúc Kháng, *Phan Tay Hồ*, p. 9.

なお、Nguyễn Thê Anh, ed., *Phong Trào Kháng Thúc miền Trung năm 1908 qua các Châu Bản Triều Duy Tân*. (Bô Văn Hoá Giáo Dục và Thanh Niên, Saigon, 1973) 所収のファン・チュ・チンに対する1908年の判決文によれば、彼は「はじめ翰林院檢討〔従七品〕、ついで礼部刑徒、任期果してのち翰林院修撰〔従六品〕および著作の義務を果たした」とある (p. 50)。

25) この点はファン・ボイ・チャウらも同様の経験をしている。彼は仕官こそしなかったが、フェにあって比較的良心的と言われた大官たちに接触し彼らに蹶起を促がそうとしたのである。しかし彼らは現在の地位と榮誉に安住し、それを維持したいと思っているだけで、チャウの呼びかけには応じようとしなかった。Phan Bội Châu, *Ngục Trung Thu*, (邦訳 pp. 112-113)



ハエの如くブンブと骨をかじり箸をなめる  
そればかりか その中間にもゴチャゴチャという  
官ともなれず また民とも言えない  
彼らは学士とか文人の連中で  
衣食に充りて 身は何も働かない<sup>26)</sup>

これはファン・チュ・チンの『醒国魂』というベトナム語詩の一節である。この詩の製作年代は明らかではないが、少なくとも彼が従来の官吏や知識人に絶望した後の作であることには間違いない。

そうして彼は1904年実際に官職を辞すに至ったのである。

従来の官吏のあり方、そして伝統的知識人の存在形態そのものに対する否定は、この時代の開明的知識人に特徴的な要素の一つである。そしてこれは窮極的には、ベトナムの亡国の現状に対する焦燥感とつながっている。すなわちベトナムの保護国化と、それに引き続く抗仏蜂起の挫折は、換言すればベトナム朝廷および官吏のフランスに対する協力、妥協、屈服を意味するものであった。既に19世紀抗仏蜂起の過程で、ドンカイン新国王(Đông Khanh)を擁するフェ朝廷は、蜂起を指導する在村知識人層と敵対し、フランスに妥協する存在としてあった。<sup>27)</sup> 朝廷の傀儡化は蜂起鎮圧の過程で進行した。朝廷はフランスの走狗として反徒の弾圧にあたった。そして蜂起鎮圧の後、とりわけP・ドゥーメル総督時代(P. Doumer, 1897—1902)になると、朝廷に対するフランスの干渉はますます露骨となった。例えばフランス人トンキン理事長官(Résident Supérieur, 統使)による北圻行政権の直接掌握(1897)、アンナム理事長官(欽使)による朝廷最高決定機関の主宰(1897)や中圻財政権の掌握(1898)などは、朝廷の権限の失墜の明白な指標であった。<sup>28)</sup>

他方フランスの支配下に実施された直接税の増大、公共事業のための賦役強化、アヘン・アルコール・塩の専売制(密造取締り、消費強制を含む)の導入は、その直接的施行者たるベトナム人官吏、村役人の徴税・徴発・取締り・消費強制の義務を増大せしめた。彼らはフランス植民地支配機構の末端に組み込まれたがゆえに、一般民衆に対する直接的収奪者・弾圧者とし

26) Nguyễn Hiền Lê, *op. cit.*, p. 96. 卿相は大臣、縉紳は官吏や上流の人間、秀才は郷試合格者、耆豪は村内の有力者。訳出にあたっては、竹内与之助・教授の御示唆をいただいた。

27) David Marr, *op. cit.*, pp. 28-39; Truong Buu Lam, *op. cit.*, pp. 6-10, 33. この間の仏越交渉を概観するためには、

Phan Khoang, *Việt Nam Phêp Thuộc Sử*. (Khai Trí. Saigon, 1961); Nguyễn Thê Anh, *Việt Nam dưới thời Pháp Độ hộ*. (Lua Thiêng. Saigon. 1970).

28) これについては、

Joseph Buttingr, *Viet Nam; A Dragon Embattled*. (Praeger, New York, 1967). vol. 1. pp. 13-62; Lê Thanh Khôi, *Le Vietnam; Histoire et civilisation*. (Paris, 1955). pp. 392-400; Jean Cesneaux, *Contribution à l'histoire de la nation vietnamienne*. (Paris, 1955). pp. 153-175. (斎藤・立花訳『ベトナム民族形成史』理論社, 1970); Nguyễn Thê Anh, *op. cit.*, pp. 111-122.

での役回りを請け負わされることとなったのである。<sup>29)</sup>

また対仏協力を嫌って職を去る官吏の欠を補うために、蜂起鎮圧の功労者や対仏協力者たる通訳など、「未熟練かつ不誠実なベトナム人」が官職につき、科擧の神聖な権威は踏みにじられた。<sup>30)</sup>

このようにして朝廷はその権威を失墜し、官吏は腐敗墮落したものとみなされた。そのことは科擧によって朝廷の統治体制に知識人層を収束・序列化してゆく従来の機能が、その権威を失ったことを意味している。伝統的知識人の中に、官途を拒み、科擧やそのための学問を排斥して野にあることを強く主張する部分が出現し始めたのである。

例えばファン・チュ・チンの盟友で、共に南遊(後述)したフィン・トック・カンとチャン・クイ・カップが、その途次で作した賦『名山良玉』(1905)に、当時の開明的知識人の主張が良く示されている。

俗尚文章，士趨科目。

大股小股終日魚魚，五言七言窮年鹿鹿。

文策希場官之鼻息，跖可是而舜可非。

詞賦拾北人之唾餘，駢爲四而儷爲六。

擾擾功名之輩，齊市攫金。滔滔利祿之徒，楚庭獻玉。

蓋不惟私身家取利祿，爲百途之逐逐。而且驅千萬人之紆曳紳衿。

と科擧、旧学(伝統的な学問)の弊情、仕官のために汲々とする知識人の有様を風刺し、ついで、

民智何以開，人才何以育。

嗟乎痛哉。牽延以有今日之苦辱者。

誰階之厲而流之毒也。

事勢至斯人情鬱鬱，公益公搜今日明日。

とベトナムの窮乏化、後進性、一般庶民の困窮と過重な人頭税や賦役(公益公搜)の下での疲弊を指摘し、最後に、

上自官吏，下及諸生，投筆而起，掛官而行。

と知識人に決起を呼びかけている。<sup>31)</sup>

29) Ngo Vinh Long, *Before the Revolution*. (MIT Press, 1973); Pham Cao Du'ong, *Thực Trạng của giới Nông dân Việt Nam dưới thời Pháp thuộc*. (Khai Tri, Saigon, 1965). などを参照。

30) Ngo Vinh Long, *op. cit.*, p. 68.

31) Lam Giang, *op. cit.*, 漢文之部, pp. 14-16.

Nguyễn Q. Thàng, *Huyñh Thúc Kháng*, (Phụ Quốc Vụ Khanh Đặc trách Văn Hoá x. b., 1972.), pp. 353-358. 賦の中で、「大股小股」は八股を示す。「科目」は科擧の試験、「場官」は試験官。「跖」は大盗賊、「舜」は忠孝なる者。「齊市攫金」は市場で金を盗んで捕まった者の故事、「楚庭献玉」は王に玉を贈ったが、かえって単なる石と思われて罰せられた忠臣の故事。「北人」は中国人。「公益公搜」は人丁税と賦役。「掛冠」は官を辞すこと、である。

ここに盛られた主張は、同じ機会に詩『至成通聖』を作り、1年後に『インドシナ総督あての書簡』をしたためたファン・チュ・チンの主張と同一のものであった。

#### IV 新 書

ファン・ボイ・チャウによれば、彼が初めて新書に接したのは1897年フエに上京した折のダオ・グエン・フォ(Đào Nguyên Phó)やグエン・トゥオン・ヒエン(Nguyễn Thuởng Hiến)などとの交際を通じてであったと言う。<sup>32)</sup> フィン・トゥク・カンによれば、彼やファン・チュ・チンが初めて新書と邂逅したのは、1903~04年ダオ・グエン・フォ(上述)やタン・チョン・フエ(Thân Trong Huê)の蔵書を通じてであったという。<sup>33)</sup>

1900年前後、彼らが遊学や受験、仕官の際にフエに上京した際に、彼地の知識人サークルを通じて新書の洗礼を受けていったことがわかる。当時のフエは、多くの書籍と人才の蛸集する場所であり、政治への関心や最新の知識と情報が渦巻く地であった。ところでここで新書と言うのは、中国から流入してきた新たな知識や思想(すなわち洋務思想、変法自強思想)についての本である。ファン・ボイ・チャウ、フィン・トゥク・カンの述懐によれば当時彼らが実際に接した書籍としては、『瀛環志略』『中東戦記』『普仏戦記』『戊戌政変記』『中国魂』『新民叢報』『日本維新史』などがあったと言う。<sup>34)</sup> しかしファン・ボイ・チャウたちが新書と呼ぶ時、これにはさらにベトナム人先覚者の著述も含まれていたようである。つまり19世紀後半のベトナムにも、既に何らかの意味でベトナムの開明化の諸方策を提唱する人士が存在していたのである。それは、もっぱらベトナム人カトリック教徒や欧米・香港などに実際に赴いた人々からなされたものであった。彼らは西欧の実力に圧倒され、ベトナムがその力に併呑されてしまう前に、有効な措置を講じておくことの重要性をくり返し強調した。その中でもカトリック教徒のグエン・チュオン・ト(Nguyễn Trường Tô)が特に著名である。<sup>35)</sup>

32) Phan Bội Châu, *Tự Phan*, p. 27.

33) Huỳnh Thúc Kháng, *Tự Truyện* p. 26; Huỳnh Thúc Kháng, *Phan Tây Hồ*, pp. 15-16.

34) Huỳnh Thúc Kháng, *Phan Tây Hồ*, p. 14; Huỳnh Thúc Kháng, *Tự Truyện*, p. 26; Phan Bội Châu, *Tự Phan*, pp. 26-27.

『瀛環志略』は1840年代に徐繼畬によってまとめられた一種の世界地理書。中国洋務思想の先駆となすべきものである。『中東戦記』は『萬國公報』主筆ヤング・アレンの著述の翻譯(1897年)を指すと思われる(小野川秀美『清末政治思想研究』 pp. 12-13, 181-182)。『新民叢報』は亡命中の梁啓超らによって1902年から横浜で刊行された隔週刊雑誌。

『日本維新史』については、梁啓超「東籬月旦」(1902年著)(『飲水室文集』上巻, 教育83ページ)によれば、日本文『明治三十年史』を上海広智書局で翻譯・刊行し、『日本維新三十年史』と改題したとあるので、あるいはこれのことかもしれない。なお、Nguyễn Hiến Lê, *op. cit.*, p. 27によれば、日本関係の書としては、『日本国史』『日本維新梗概史』『日本三拾年維新史』がベトナムに伝わったとする。『日本国史』は黄遵憲の著作(1896年頃出版)のことであろうか。(小野川, 前掲書, pp. 114-116)。『日本三拾年維新史』は上述『日本維新三十年史』のことであろう。

35) Phan Khoang, *op. cit.*, pp. 118-123; Nguyễn Thế Anh, *Việt Nam*, pp. 66-73; Đặng Huy Vận 論文 in *Nghiên Cứu Lịch sử*, no. 94. などを参照。

19世紀の末になるとグエン・ロ・チャック (Nguyễn Lộ Trạch) が『時務策』を上奏し (1877・1882)、ついで警世の書『杞憂録』 (1884)、『天下大勢論』 (1892) を執筆している。『時務策』は海防や遷都などの軍事的諸方策を提案したもので、まだ洋務思想的な色合の濃いものであったが、『天下大勢論』になると、政教の再組織、西洋の科学技術の摂取、農工商の振興を提言するに至ったと言われる。<sup>36)</sup> 1890年代になるとこのグエン・ロ・チャックの周囲には、グエン・トゥオン・ヒエンなどが集まった。

さらに20世紀近くになると、上述した人士たちが多くの新書を蔵するようになり、やがてファン・チュ・チンたちは彼らとの交際や蔵書を通じて、新書に接していくことになったのである。

彼らがこういった新書に接した時の衝撃ははなはだ大きなものであったろう。とりわけ康有为や梁啓超の主張が、いったんは「国是」として皇帝に採用されたこと、そしてその変法が百日ならずで譚嗣同の死を伴う政変で結末を迎えたこと (1898) は、1900年の唐才常の自立軍事件などと共に、ベトナム知識人の耳目を十分にそばだたせたであろう。<sup>37)</sup> さらにそれ以上に康・梁らの説く封建中国の改革の諸方策は、同様の閉塞状況にあって同じような問題を課されていたベトナム人をして、その愁眉を開かしめ、目から鱗がおちるの感を強くさせたことであろう。その衝撃の大きさは、1903年頃にファン・チュ・チンが新書に邂逅してからほんの1～2年後には官を辞して中圻南部諸省の行脚に出立した事実からも、推し測ることができる。

むしろD・マーの指摘するごとく、洋務思想や変法自強思想、そして敵復の紹介した天演論などを、当時のベトナム人がどれだけ正確かつ完全な形で理解したかは不明である。<sup>38)</sup> しかし中国からの思想の伝達がどのように不完全なものであったとしても、当時のベトナム知識人には、自分たちの置かれていた状況の中でそういった断片的な情報をつなぎ合わせ、組み立て直すだけの自覚的な能力はあったはずであり、またそれをなさねばならない切迫感が、客観的状況として現に存在してもいたのである。

例えば彼らは、新書の影響を受ける中で、亡国の自覚や民族滅亡の危機感を闡明にしていた。ファン・チュ・チンの『インドシナ総督あての書簡』 (p. 565に引用) の中で、「[ベトナムは] かつて半開の地位にまで至らんとした時期もあったが、今やまた野蛮に戻らんとしている。知識を持つ人間はこのような惨状を見て、民族が全滅するのではないかと恐れ」ている。と述べ、民族滅亡の危機を、野蛮—未開—文明といった進化論の脈絡の中で理解せんとしている。<sup>39)</sup>

36) Huyhnh Thúc Kháng, *Nguyễn Lộ Trạch* (Anh Minh. Huê, 1966); Nguyễn Văn Xuân, *op. cit.*, pp. 17-35.

37) Huyhnh Thúc Kháng, *Tự Truyện*, p. 26. 参照。

38) David Marr, *op. cit.*, pp. 98-100.

39) 1904年に著わされたという『文明新学策』 (ヴァン・ミン・タン・ホク・サク) の中にも、野蛮—半開—文明といった進化論的言及がなされている。Đang Thai Mai, ed., *Văn Thơ Cách Mạng Việt Nam*. (NXB Văn Học, Hanoi, 1974. ) p. 208.

またドンキン義塾が広めた詩『地理』<sup>アイソラー</sup>の一節には、

生涯は競争であり、人種が賢ければ生き、愚かならば滅びる。<sup>40)</sup>

とあり、チャン・クィ・カップの詩『国魂を昭らかにする』<sup>あき</sup>の冒頭には、

世界の列強は競争し合って

知識を開き富強に努めてきた。<sup>41)</sup>

とある。彼らは亡国、滅種の危機を、優勝劣敗・生存競争の考えに沿って解釈せんとしている。

こういった中国伝来の進化論や生存競争の思想がベトナム知識人にアピールしたのは、彼らの心中に従来から存在した亡国・滅種の危機感のゆえにほかならなかった。またそれら中国思想の摂取が、いかに不完全かつ断片的なものであったとしても、彼らの危機感を転回軸として、それら外来の思想を自家菜籠中の物とすることが可能だったのである。

同様にして従来彼らの心中に漠然としてあった官吏や朝廷に対する義憤、科擧や旧学に対する猜疑は、中国からの思想に触れることによって明確な意識に昇華し、具体的な実践行動の方法を啓示されたのであった。今や彼らには従来の学にとって代わるべき新たな学が示されたのであった。

## V 南 遊

以上にファン・チュ・チンたちが旧来の官吏や知識人のあり方を否定し、科擧や旧学を排斥するに至った過程を分析してきた。このようにして覚醒した知識人たちは、いよいよ実践活動に着手することによって、自己の信念を具体化しようと考え始めた。

彼らがその主張や理念を普及し、運動を拡大するために取った手段には四つあった。第一は、むろん自らの手で学会や演説会を組織し、日常的にその指導にあたる方法である。しかしこれは地域的にも、また個人の能力から言っても、さほど広い範囲にわたって運動を広める手段とはなりえない。第二の方法としては、各地への行脚、遊説であり、その土地土地に赴いて現地の人士と接触したり、演説したりして人間関係をたぐりつつ組織化してゆく方法である。第三は、書籍、パンフレットなど、書かれた文書による普及である。体裁は印刷物、手書き原稿、筆写、あるいは合法・非合法の別を問わない。それらは人々の手から手へと回し読みにされた。第四は、ベトナム語詩歌の口伝による普及である。六声のトーンを持つベトナム語は、その生まれながらの音楽性によって、聞く人の耳に快い響きを与える。ましてや韻と平仄を整えた詩歌は、それを吟ずること自体が既に音楽そのものである。<sup>42)</sup> このようにして彼らの主張を

40) Nguyễn Hiền Lê, *op. cit.*, p. 71. この詩は、梁啓超の『新民説』の一節「就優勝劣敗理以證新民之結果……」の翻案であると思われる。(『飲氷室文集』広智書局、上海、上巻)

41) Nguyễn Văn Xuân, *op. cit.*, p. 177.

42) 現実に、開明的知識人の組織した学会(新学を教える学校)では、音楽の時間に唱歌の代わりとして、ベトナム語愛国詩歌の吟詠がなされた。

快い旋律の中に織り込んだ詩歌は、人の口から口へと歌いつがれ、時には覚え間違いや欠落、即興の追加や修正を伴いつつ、文字も読めず漢文の素養もない人々の間にさえも広まっていったのである。

ファン・チュ・チン、フィン・トゥク・カン、チャン・クイ・カップたち三人の最初の実践活動は、中圻南部諸省への行脚であった。これは一般に、南遊（Nam Du）と呼ばれている。1905年旧暦2月、故郷のクアンナム省を出立した三人は、海岸線に沿って南下して行った。その行く先々での宿泊場所や各地人士との接触は、彼らの持っていた人間関係の絆によるところが大きい。ベトナム社会においては、師弟、友人、肉親といった人間関係が大きな威力を発揮する。とりわけ一般人の旅行に多大な不便がつきものであった当時においては、それが決定的である。しかもクアンナム省は、それ以南の諸省に対して文化的威信を享受しており、自己の省内に良師のいないそれら南部諸省から多くの学生を集めていたという。中でもチャン・クイ・カップは既にこの頃より教師としての名声を得ていたといわれる。<sup>43)</sup> この師弟関係にまつわる縁故は、どこでも大きな威力を発揮したことであろう。さらに彼らの活動を容易ならしめた条件として、彼らの獲得していた名声と肩書をあげることができる。ファン・チュ・チンが、南遊の帰途クァンガイ省（Quảng Ngãi）で、未だ面識のない人士レ・キェット（Lê Khiết）に面会を求めた時に威力を発したのも、彼の持っていた肩書にほかならなかった。<sup>44)</sup>

さてファン・チュ・チンたちは南下の途次、ビンディン（Bình Định）に赴いた。ここは当時郷試の開催されていた五都市（脚注9参照）の内フエ以南の唯一の都市であった。彼らがこの最南端の文化的中心地に赴いた時、たまたま省学の定例試験があった。彼らも試験生として紛れ込み、題に応じて詩『至誠通聖』、賦『名山良玉』を作った。科挙や旧学の弊、官吏の腐敗を痛烈に批判したこれら詩賦は、省学の学生たちの間に広まった。<sup>45)</sup>

この後ファン・チュ・チンたちは、カムラン湾（Cam Ranh）に至り、日本海に向かう途中のバルチック艦隊に遭遇した。彼らは小舟を雇って商人に変装し投錨中の艦船に近づいたという。<sup>46)</sup> 彼らはこのような方法で東アジアの一角に起こりつつある歴史事象の一端にじかに触れたのであった。

さらに南下してビントゥアン（Bình Thuận）に達した時ファン・チュ・チンが病気になったため、二人の盟友は彼一人を残して一足先にクアンナム省へ戻った。チンは病気を癒しつつ、当地の知識人との接触を通じて、維新運動の実践を促した。その結果として生じたのが、フータイ村の亭（Đình, 村の集会所・守護神の社）に設けられた書社と演説会であった。これはファン・チュ・チンの感化を受けた地元の知識人ホ・タ・バン（Hồ Tá Bang）が中心となって

43) Nguyễn Văn Xuân, *op. cit.*, pp. 119–123.

44) Huỳnh Thúc Kháng, *Phẩm Tây Hồ*, pp. 44–46.

45) Nguyễn Văn Xuân, *op. cit.*, pp. 130–131.

46) Huỳnh Thúc Kháng, *Tự Truyện*, pp. 27–28.

組織したものである。書社では新書が紹介され、新しい思想が普及された。演説会ではしばしばファン・チュ・チンが演壇に立った。

病気の回復したあとファン・チュ・チンはクアンナム省に戻ったが、彼がビンディン省に種蒔いた運動は、翌1906年グエン・チョン・ロイ (Nguyễn Trọng Lợi) らの手によって、「連成公司」Liên Thành Công Ty) (ヌオクマム、魚などを扱う商会)、「育英」(Dục Anh) (学会)の組織化に至って結実した。<sup>47)</sup>

南遊を終えてクアンナム省に戻ったファン・チュ・チンたちは、いよいよ自分の省においてもピントゥアンで行なったのと同様な組織活動を本格的に開始するに至った。

他方ファン・ボイ・チャウは同じ頃、富国強兵と近代化の先輩国日本に赴き、彼地で東遊運動 (Phong Trào Đông Du) を組織した。またハノイの知識人たちは1907年に、ドンキン義塾 (Đông Kinh Nghĩa Thục) を設立している。このようにして彼らの運動は拡大した。

## VI 商品経済

ファン・チュ・チン、フィン・トック・カンたちの故郷クアンナム省からは、彼ら以外にも著名な開明的知識人が輩出している。例えばグエン・タイン (Nguyễn Thanh), チャン・カオ・ヴァン (Trần Cao Văn) などがそうである。また南遊から戻ったチンたちの呼びかけに応じて、省内の多くの村落に学会、商会、農会などの組織が作られた。このような運動は、中圻の他省に比してクアンナム省がきわだって活発であったようである。どうしてこの省が他省に比べて活発となったのであろうか。同様の疑問は、ファン・ボイ・チャウ以外にも、ゴ・ドック・ケ (Ngô Đức Kế) やダン・グエン・カン (Đặng Nguyên Cẩn) などを生み出したゲアン、ハティン両省地域についても問うことができる。

考えられる要因の一つとして、これらの地域が中圻の他省に比して農村部における商品流通の拡大や商品経済の浸透が顕著であったことが考えられる。

その領域内にファイフォ (Faifo, 現在のホイアン), ツーラン (Tourane, 現在のダナン) といった国際商港を持つクアンナム省は、王都フエに近かったことも手伝って、絹・綿布などの手工業、肉桂・砂糖などの商品作物栽培が早くから発展していた。ホイアンには中国人街もあり、中国人商人の農村部への往来もあったであろうし、また上述のごとき産業の発展は必然的に商品経済の進展をもたらした。<sup>48)</sup>

47) Châu Hải Kỳ, "Tìm Hiểu Những Hoạt Động Cách Mạng của Phan Chu Trinh tại Bình Thuận." in *Bạch Khoa*, no. 101; Nguyễn Hiền Lê. *op. cit.*, pp. 24-25, 139-140; Nguyễn Văn Xuân. *op. cit.*, pp. 26, 136-137, 195.

48) クアンナム省については『海外紀事』(17世紀) (越訳, Hải Ngoại Kỳ Sự, D. H. Huê, 1963. ). 『撫辺雜録』(18世紀) (Phủ Quốc Vụ Khanh Đặc Trách Văn Hóa X. B., Saigon, 1973. ); 『大南一統志』(19世紀) (Nha Văn Hóa, Saigon, 1964) などが参考となる。なお Nguyễn Văn Xuân. *op. cit.*, pp. 79-99 も参照。

例えばフィン・トゥク・カンの父が商品作物たる肉桂園を所有していたことは興味深い。<sup>49)</sup> またハノイに設立されたドンキン義塾の指導者が西湖ファッション（西湖はファン・チュ・チンの号）と称してクアンナム省産の黒布地で作った国産の洋服を着ていたという事実も示唆的である。<sup>50)</sup> 1908年農民運動がクアンナム省から他省へと拡大したのは、ホイアンと各地を往来する商人の噂を媒介としてであったというフィン・トゥク・カンの証言<sup>51)</sup>からは、町と農村、農村から農村へと動き回る商人の存在や彼らが各地間の情報の伝達を仲介する役割を持っていたことがうかがわれる。

ファン・ボイ・チャウたちの出身地であるゲアン、ハティン両省地域についても、商品経済の発展がみられたと考えられる。同地域は古くより林業やそれを利用しての造船業などが盛んであった。<sup>52)</sup> そして1894年にはゲアン省都ヴィン(Vinh)の近郊ベントゥイ(Ben Thuy)に仏印当局随一の銅銭造幣所が設立され、<sup>53)</sup> 1905年頃にはハノイーヴィン間の鉄道が敷設されて貨物輸送が開始された。さらにはヴィンーベントゥイ地区に鉄道修理工場(1908)、林産を利用したのマッチ工場が設立され、仏領時代の中圻における数少ない工業中心地の一つとなったのも、以前からこの地方に手工業・商業の発展の基盤があったからだと思われる。<sup>54)</sup>

商品経済の発展は、当然ながら同時に、知識人層をもその中に巻きこむこととなったであろう。

このような傾向は、一方において知識人層が商会や農会(商品作物栽培)に関心を向けてゆくだけの、商工業や近代的経営に対する予備知識や関心をもたらした。他方では、彼らが維新運動の中で農会や商会に現金を投資し、学会(新学学校)を運営するのに十分な経済的余力をももたらした。また東遊運動に(最高時には)100名以上の留学生を送り出し得るだけの渡航費・滞在費を負担せしめる金銭的能力をもたらした。

例えばクアンナム省のホイアンにつくられた商会の一人当たりの投資は50ピアストルであった。<sup>55)</sup> またファン・ボイ・チャウが日本に渡った後初めてベトナムに帰国した折、同郷の富豪の息子チャン・ドン・フォン(Trần Đông Phong)は、白銀15笏、銀元200枚を資金援助したと言う。フォンは後に渡日し、日本で自殺した。<sup>56)</sup> もう一つの例をあげれば、ファン・ボイ・

49) Huỳnh Thúc Kháng, *Tự Truyện*. pp. 25-26.

50) Nguyễn Hiền Lê, *op. cit.*, p. 86. ファン・チュ・チンの断髪、洋装運動における役割を示していて興味深い。

51) Huỳnh Thúc Kháng, "Vụ Kháng Thuê ở Trung Kỳ năm 1908," in Thái Bạch, ed., *op. cit.*, pp. 372, 379.

52) 『撫辺雑録』巻六。および潘嘉絳『越南手工業発展史初稿』(北京:商務印書館) pp. 19, 53.

53) 横浜正金銀行調査課『仏領印度支那貨幣史』p. 56.

54) Tran Huy Lieu, *Les Soviets du Nghe-Tinh*. (Hanoi, 1960).

*President Ho Chi Minh*. (邦訳、原・太田訳『ホー・チ・ミン——人とその時代』東邦出版、昭和43) 邦訳, p. 226.

55) Phan Chu Trinh, *Trung Kỳ Dân Biên Thị Mạt Kỳ*, (P.Q.V.K.Đ.T. Văn Hóa, Saigon, 1973) p. 77.

56) Phan Bội Châu, *Ngục Trung Thu*, (邦訳 p. 127)



チャウらが初めて渡日する時、その三人分の旅費として集めた資金は実に 3,000 ピアストルに達した。彼や仲間たちが有志に運動して募ったものである。<sup>57)</sup>

商品経済面の発展は、このようにしてクアンナム省、ゲアン省などを中圻において突出した地域とさせたが、同様の傾向は、この地域に留まらず他の諸省にも程度の差こそあれ存在していたであろう。東アジアにおける銀貨の流通、フランスによる植民地化に伴っての税の銀納化（中圻においては 1899 年に租税・人頭税が完全に銀納化されたもようである<sup>58)</sup>）、アヘン・アルコール・塩の専売制の導入と消費の強制、鉄道の開通（ハノイ＝ヴィン間 1905 年、フエ＝ダナン間 1907 年）<sup>59)</sup> などの諸事象は、それと無関係ではなかったであろう。

## VII インドシナ総督あての書簡

ファン・チュ・チンは南遊から戻ってしばらくすると今度は北圻へと足を向けている（1905 年 12 月）。そしてその足でハイフォン（Hải Phòng）より出立し、香港を經由して日本へ赴いている。数週間の日本滞在ののち、ベトナムに戻ったのは 1906 年 4 月前後のことであった。<sup>60)</sup>

帰国後しばらくして彼は、1906 年 8 月付で『インドシナ総督あての書簡』（以下『書簡』と略述）をしたためた。

この『書簡』が一種の「上奏書」であり、康有為が中国において光緒帝に変法を国是とするのを認めさせたのと同様の効果を、フランス人総督に対して期待したものであったことに相違はなからう。<sup>61)</sup> 確かに当時の総督ポール・ポー（P. Beau）（1902—1908）には、以前の総督に比して柔軟な発言があり、北圻の学制改革に着手したりしていた。<sup>62)</sup> そこにファン・チュ・チンは期待を抱いたのかもしれない。

最近北から南まで民が噂するに、南国〔アンナム朝廷〕あるいは政府〔総督府〕の統治政策は方針を変えようと欲しており、フランス人とベトナム人が心を合わせ力を合わせるようにせしめている。これはまさに長期の堅固かつ安定した計策である、と。<sup>63)</sup>

だがむろんそれには限界がある。

私は常に各新聞上の総督の演説を読むに、ある時はベトナム人を寛大に扱うと言ひ、法律を改めると言ひ、学校を開くと言ひ、また他のことについても多くを語っている。し

57) Phan Bội Châu, *Tự Phan*. p. 44. ピアストル価値は、1903年に 2 フラン14, 1907年に 2 フラン80であった。Jean Chesneaux, *op. cit.*, p. 163, note 1.

58) 『大南一統志』「戸口」「田賦」の項。

59) Nguyễn Bá Trác, *Hoàng Việt Giáp Tý Niên Biểu* (越訳, 皇越甲子年表). (Bộ Quốc Gia Giáo Dục, Saigon, 1963). p. 357.

60) Huỳnh Thúc Kháng, *Phan Tây Hồ*. pp. 18–22.; Phan Bội Châu, *Tự Phan*. pp. 69–72.

61) Tôn Quang Phiệt, “Phan Chu Trinh,” in *Nghiên Cứu Lịch Sử*. no. 70; David Marr. *op. cit.*, p. 163.

62) 1906年北圻に新たな「学法試法」が制定されている。『大南典例撮要』（越訳, V. Đ. H. Saigon, 1962）。

かるに官吏の問題と賦役の問題についてはふれようとせず、新たな法律を出す意志を示していない。<sup>63)</sup>

ファン・チュ・チンは、官吏の弊害と、税・賦役の弊害を根本的・致命的な問題として認識し、従来のフランスの統治が、これらの問題を全く無視し続けてきたことを鋭く告発している。『書簡』の三分の二以上の紙数が、まさにこの問題のために費やされているのである。第1に、フランス人がベトナム人現行官吏体制を黙認していること。第2にフランスがベトナム民族を軽蔑視していること。第3にベトナム人官吏はこれを良いことに民を搾取・弾圧していること。第4に、富国の諸方策が取られず、逆に税・賦役がますます過重化されていることを指摘している。<sup>64)</sup>

このままの状態が続けば事態はますます悪化し、ついにはベトナム民族が減びてしまいうらう。ベトナム人はそれを予見するがゆえに、フランス人からますます離間し、日本を頼りにするようになり、フランスに対して武力で抵抗することとなろう。<sup>65)</sup>とその危惧を表明している。ここには彼の対日観や武力革命路線に対する態度が示されている。それと共に日露戦争後インドシナのフランス人が抱くに至った日本への恐怖感にかこつけて、巧みに訴えかけようとする弁舌家ファン・チュ・チンのしたたかな一面をうかがうことができる。

以上のような悲惨な結末の到来を、未然に防ぐためにはどうしたらよいか。彼は提議する。もしも政府〔インドシナ当局〕が真に政策を変え、賢才の人を選んで権力を委ね、礼をもって接し、誠をもって遇する心を持っているならば、そしてまた国内の害を排して利を取ることを計り合っ、貧民に生計の道を開き、紳士に対しては論ずるの権を広くせしめ、報館を広く開いて民情に通ぜしめ、賞罰を厳にして官吏を戒め、さらには法律の改正、科挙の廃止、学校の開設、修書所の設立、師範の学から工商美芸の学までの教育、税・賦役の改良を徐々に行なえば、民は安んじて生計をなし、士は喜んで政府に協力し、ただひたすらにフランス人がベトナム人を捨てて出てゆくことを恐れ、誰も反抗を謀らうとはしなくなる。<sup>66)</sup>

要約すればここでファン・チュ・チンが提議しているのは、真の人才を登用することである。真の人才とは、フランス当局と協力して従来の弊害を一掃し、開明的な諸方策を実現してゆくような人々である。つまり彼の主張は、現行の腐敗堕落した官吏制度の廃止と、それにとって代わるべき新たな知識人の登用にあった。「賢才の人」すなわち新学に目ざめ維新運動を推進

63) 『インドシナ総督あての書簡』原漢文。本稿では、Thái Bạch, ed. *Thi Van Quốc Cảm thời Pháp Thuộc* (Khai Trí. 1968) の越訳に依拠した。(引用は、p. 362) ほかに *Nghiên Cứu Lịch Sử*. no. 66; Thê Nguyên, *Phan Chu Trinh*. (Tân Việt, Saigon. 1956) にも越訳が収録されている。

64) *Ibid.*, pp. 350-361. なお、David Marr, *op. cit.*, pp. 159-163. 参照。

65) Thái Bạch, ed., *op. cit.*, pp. 362-365. また1907年にハノイの『大越』紙に載せた記事の中でファン・チュ・チンは、「外国に頼るな、外国に頼ることは愚かだ。暴動をおこすな、暴動をおこせば必ず死ぬ。」と述べたという。外国とはこの場合、日本のことである。Huỳnh Thúc Kháng. *Phan Tay Hồ*. p. 22.

66) *Ibid.*, p. 365.

しつづつあった有為の知識人たちを抜てきし、それにベトナム改革と開明の諸方策を実行する権限を委ねよ、と言っているのである。

これは現行のベトナム官界を全面否定しようとするものであると共に、旧学派知識人に対して開明的知識人を対置せしめる大胆不敵な挑戦の宣言でもあった。フランス人支配を前提とするものではあるにせよ、こういった官界への挑戦は、開明的知識人のそもそもの理念からすれば当然なされてしかるべきものであった。

旧学派の知識人、その中核たるベトナム人官吏たちは、ファン・チュ・チンのこの挑戦の意味を直ちに理解した。朝廷の輔国府関係資料の中に、次のような文がある。

総督府が〔ファン・チュ・チン〕の陳述文〔『書簡』のこと〕を添えて問い合わせてきた。（これには当国の危険な状態が述べられている）。この陳述文を見るに、朝廷を誹謗し、官吏を侮辱するは無論、多くの無謀な言辭ばかりが弄されている。<sup>67)</sup>

このようにファン・チュ・チンたちの維新運動には、国王・朝廷を頂点にいただく旧エリートに対する開明的知識人の権力闘争としての側面が存在した。ファン・チュ・チンがその上申・献策の書を国王には出さず、総督にあてて出した意図はそこにあった。しかも彼の献策の書は直ちにフランス語に訳され、官報に載せられたのである。<sup>68)</sup> これはベトナム人官吏たちにとって、由々しき大事であったに相違ない。それゆえに旧エリートは、その地位と権限を十二分に利用して自己の敵対者を抹殺せんとはかった。ファン・チュ・チンの言辭を借りれば、

国内の紳士のある者はフランス語を学ぶことを提唱し、ある者は科擧の廃止を要求し、ある者は商局を開くために資金を投ずる。その意は百のうちの二、三でも救おうと言うことである。しかるに官吏は、そうすることが自分たちに抵抗せんとすることであると憎み、狂気と称し、陰謀とみなし、中傷讒言をいつも保護官〔フランス人官吏〕の耳に入れる。<sup>69)</sup>

クアンナム省で府学教授をしていたチャン・クィ・カップ、ゲアン省の督学ダン・グエン・カン (Đặng Nguyên Cấn) は、それぞれ他省に左遷された。<sup>70)</sup> 左遷は官吏たちの用い得る合法的な弾圧手段の一つである。しかし開明的知識人のほとんどは官職に就くことを潔しとしなかった。従って左遷を手段として用いようとしても対象となりうる者はほとんどいなかった。弾圧はより露骨な形態を取るようになる。1907年ハティン省 (Hà Tĩnh) のゴ・ドック・ケ

67) Nguyễn Thê Anh, ed., *Phong Trào Kháng Thuê*. p. 51. この詮議の結果、彼には『謀反未行』の罪が課され、流刑とされた。

68) David Marr, *op. cit.*, p. 163. (note, 14) によれば、1906年10月、*B. E. F. E. O.* 7号に載せられたと言う。なおファン・チュ・チンたちの運動と、P・ボー総督の統治の改良主義的色彩（北圻での学制改革、ハノイ大学設立）との間の関係についての検討が、今後は是非とも必要である。

69) Thái Bạch, ed., *op. cit.*, p. 358.

70) Phan Chu Trinh, *op. cit.*, pp. 67-75, 89-91. 開明的知識人は、一般に官職に就くことを拒んだが、教育的官職だけは例外だったようである。

71) *Ibid.*, pp. 88-89.

(Ngô Đức Kê)たちは按察使によって捕われ、罪状もないのに1年以上投獄され、重刑の判決を受けた。<sup>72)</sup>

1908年になると、ハノイには兵營投毒事件、クアンナム省を中心とした中圻諸省には農民抗税運動が起こった。これはベトナム人官吏たちにとって、開明的知識人いっせいで弾圧の絶好の機会を与えた。またフランス人にとって、これはまさに青天の霹靂であった。19世紀の抗仏蜂起鎮定によってベトナムを完全に平定し終えたと信じていたからである。強い衝撃をうけたフランス人は、ベトナム人官吏たちによる弾圧を大いに督励する存在となった。<sup>73)</sup> 振子は大きく右に傾いたのである。

カインホア省 (Khánh Hòa) に左遷されていたチャン・クィ・カップは、その省に抗税デモが生じていなかったにもかかわらず、『謀反大逆』の罪によって『四裂処死』の極刑を宣せられた。同じく農民デモに無関係なハノイにいたファン・チュ・チンも、農民抗税運動への関与を疑われて『謀叛未行』の罪による流刑とされた。当時ホイアン (Hội An) にあったフィン・トック・カンも自分の村に戻って従容と縛吏の到来を待った。彼も『謀叛未行』の罪状によって流刑に処された。<sup>74)</sup>

朝廷資料に収録された50余の判決文によれば、有罪判決を受けた者370名中 (中圻諸省総数) ははっきりと知識人と判断できる者は156名であった。そのうち死刑、流刑、およびそれらの執行緩和などの重刑を課された知識人は63名であった。<sup>74)</sup>

このようにして1908年、ファン・チュ・チンたちは旧学派との権力闘争に一敗地にまみれたわけだが、ここに至ってもファン・チュ・チンのフランスに対する態度は変わっていない。彼の場合、旧エリートとの闘争と言っても、それはフランスの支配を前提とした上での改良主義の域を越えることがなく、ここに彼の認識の甘さがあったとみなすべきであろう。この点は、ファン・ボイ・チャウがフランス支配の前提を覆がえさぬ限り旧来の官界の体制の解体はあり得ないと判断し、新知識人創出の問題を革命運動における人才育成として捉えていたのとは大きな違いがあったとみなさねばならないであろう。<sup>75)</sup>

## 結 論

本稿を要約すれば、20世紀初頭に台頭する開明的知識人の活動の軌跡を、ファン・チュ・チンはじめ四人の代表的な人物に焦点をあてつつ追究してみた。

それによると彼らは、在村の伝統的知識人の家系に生まれ、その前半生を科挙とそのための

72) Nguyễn Thê Anh, ed., *op. cit.*, p. 33.

73) Nguyễn Thê Anh, ed. *op. cit.*, pp. 43-46, 50-52, 105-107; Huỳnh Thúc Kháng, *Tự Truyện*. pp. 28-33.

74) Nguyễn Thê Anh, ed., *op. cit.* より集計。

75) ファン・ボイ・チャウとファン・チュ・チンの評価については、*Nghiên Cứu Lịch Sử* 誌, 43-143号に、44の論文が収録されている。

試験に費やしたが、20世紀初頭に至って新たな思想に開明し、新たな活動を開始するようになった。彼らにこのような過程をたどらせた要因としては、(1)フランスによる植民地化の結果として生じたベトナムの現状に対する彼らの危機感・義憤、(2)ベトナムと同様の境遇におかれた中国（や日本）での新たな胎動、の二つをあげることができよう。具体的に言えば、前者には亡国・滅種の危機感、官界への失望、科擧の権威の否定、後者には新書の影響が要因としてあげられる。<sup>76)</sup>

このようにして彼らは従来 of 知識人や官吏のあり方に疑問を抱き、それを否定して新たな知識人の創出を主張するに至る。その最初の努力がファン・ボイ・チャウの東遊であり、ファン・チュ・チンの南遊であった。

ところで以上のような開明的知識人の活動は、必然的に旧エリートへの権力闘争としての側面を持つこととなる。<sup>77)</sup> それはファン・チュ・チンの『書簡』にも如実に示されている。（しかし彼の場合そういった権力闘争は、フランスの支配を前提としてなされたものであった。）彼らの動きに対しては当然ながら、旧エリートからの反撃がなされた。1908年の弾圧の中で、ファン・チュ・チンたちは壊滅的な敗北を蒙った。

本稿においては、開明的知識人層の覚醒にその叙述の中心をおいたために、幾つかの重要な点について、十分な分析がなしえなかった。それには、ファン・チュ・チンたちのクアンナム省における運動の展開、彼らの運動の根底にある社会・経済的基盤、彼らの運動に対するフランス当局の態度、などの問題が含まれる。後日を期したい。

76) David Marr, *op. cit.*, pp. 94-97. では、(1)新思想の流入、(2)フランス人支配に対する屈辱感、(3)フランスに協力するベトナム人への軽蔑、(4)亡国の意識、が要因として列挙されている。

77) 20世紀初頭のインドネシアの知識人運動ブディ・ウトモにも旧エリートとの権力闘争としての側面があったことがうかがえる。永積昭「ブディ・ウトモの成立と発展——ジャワの民族的自覚」『史学雑誌』no. 76-2, 76-3.